station

綾乃

station

最初のデートは、横浜がいいの。
奈々はシュンにそう言った。
シュンは二つ返事でOKし、二人は横浜駅にある「赤い靴」像の前で日曜の十三時に待ち合わせた。
赤い靴像はわりと最近できたもので、回りには同じように待ち合わせと見られる男女がちらほらといた。
奈々は着ている赤いワンピースについた白い丸襟をなでながら、辺りを見回した。
横浜は、奈々が二十年間育ってきた土地だった。この駅は特に、昔からよく遊びに来ていて、想い出も沢山あった。その中でも、親友だった愛実と、買い物をした回数は数えきれないほどで、悲しい記憶もあった。
下らない喧嘩のはずだった。愛実の恋人が奈々を好きになって、別れることになった。
奈々はそんな男より愛実の方が大事で、喧嘩なんてしたくなかった。けれど、愛実は彼にのぼせ上がっていたし、プライドも高く、彼のことも奈々のことも許せなかった。
結果、愛実は奈々とお揃いで買ったネックレスを奈々に投げつけ、二度と連絡は取れなくなった。
今もワンピースの下に輝いているであろう安物の銀色のネックレスを思い、それがある辺りにそっと手を触れた。固いものの手応えを感じ、鞄の外ポケットの中身を考える。コツ、コツ、と、ふたつ、爪先で石の床を叩くと、丸でそれが合図だったかのように後ろからシュンが姿を現した。
「遅かったね、ごめん」
二人は駅ビルにあるレストランへ行き、コーヒーと、奈々はミルフィーユを注文した。
シュンは気付かないようだった。奈々は微笑み、鞄から銀色の鎖を取り出した。
彼の顔が強張った。
「これ、シュンにあげる」
シュンの前に半ば投げ付けるようにネックレスを置いた。蒼白な顔は滑稽だとさえ思った。
ねえ、シュン、わかる？
この赤いワンピースだって、靴だって鞄だってみんな、愛実とのショッピングで買ったもの。
みんな、みんな、愛実が選んでくれたもの。
あなたもそうだね。愛実が選んで、私のものになった。
さくり、と、愛実がいつもこのレストランで食べていたミルフィーユをフォークで割り、前に座る可哀想な男に、微笑んだ。